

【 おぐり ふうよう 】

小栗風葉

1875（明治8）年～

1926（大正15）年

豊橋市花田町に18年間暮らした、明治・大正時代の代表的な作家。

ベストセラー作品『金色夜叉』の著者尾崎紅葉亡き後、その続編の『終篇金色夜叉』を描いたことで有名。

代表作『青春』は、豊橋も登場し、豊川や石巻山などの描写がみられる。



小栗風葉



『小栗風葉作品集』

小栗風葉をひろめる会／編・発行

生い立ち

愛知県知多郡半田村（現半田市）の薬種商「美濃半」を営む父半左衛門、母きぬの長男として生まれた。本名を磯平といい、初孫を見た祖父甚六は大喜びで、たいそう可愛がったという。

“風葉が祖父からうけたものは多い。楽天的な性格の一面もそうだとはいえるし、何よりも重大な、風葉を文学者にさせた「小説好き」の素質も、「祖父の遺伝ではなからうか」と、風葉自身が語っているのである。”（『評伝小栗風葉』より）

しかし、後に風葉は豊橋の素封家加藤家の娘^{かすこ}籌子と結婚して婿養子となったため、家業を継いだのは三男であった。生まれ育った半田は、衣ヶ浦湾に面した港町であり、酒造地としても有名であった。出世作『亀甲鶴』は、この半田を舞台とした作品である。

野島金八郎との出会い

半田の小学校を卒業後、知多郡高等小学校衣ヶ浦学校に進んだ風葉は、作文が最も得意で、成績も優秀であった。こうした風葉の文芸的素質を見抜いて激励していたのが、同校の英語教師野島金八郎であった。野島は、風葉に文学に進むように勧めた教師であり、以前、田山花袋に文学的指導した人でもあった。

また、上京してから錦城中学校への入学を世話したのも野島金八郎であった。



『小栗風葉資料集成』

遠藤一義／編・著

小栗風葉をひろめる会／発行



豊橋公園内の三の丸会館裏にある小栗風葉の文学碑

尾崎紅葉に入門

当時文壇の花形であった尾崎紅葉の作品を愛読し、紅葉に憧れていた風葉は 1892（明治 25）年、とうとうその門下生となった。

紅葉は、門下生で玄関番をしていた風葉を厳格にしつけたが、内には温かい慈愛を含み、親身になって面倒をみてくれた。風葉が擬似コレラに罹ったときには、親から見放されていた風葉をわが子のように看病したという。

新進作家として文壇登場

1896（明治 29）年に入ってから、『寝白粉』『亀甲鶴』などを発表、その後も数多くの作品を書いたが、特に紅葉の死後未完となっていた『金色夜叉』の続篇を『終篇金色夜叉』として完成させたことは有名である。これは読者からの要望に応じてのものであったが、続けざまに増刷しても追いつかないほどの売れ行きであったという。

豊橋時代

風葉は、東京で作家活動をしていたが、1910（昭和 43）年に妻の実家がある豊橋市に住まいを移した。代表作の『青春』は、豊橋も登場している作品である。明治中期には女学生が出現して珍しがられたが、『青春』はその時代を反映した女学生をテーマとしたものであった。豊橋公園内の三の丸会館裏にある文学碑（上写真）には、

代 表 作 品

著 書 名	刊 行 年
寝白粉	1896（明治 29）年
亀甲鶴	同上
恋慕ながし	1898（明治 31）年
政鷲	1899（明治 32）年
蠶下地	同上
青春	1905（明治 38）年
恋ざめ	1907（明治 40）年
終篇金色夜叉	1909（明治 42）年

『青春』の一節が刻まれており、石巻山や本宮山の情景が描写されている。

なお豊橋市中央図書館は、風葉自筆の原稿他の資料を所蔵している。



花田町に建つ風葉の墓碑
隣には加藤家代々の墓